

ケチケ、共著『東獨逸植民史』  
エーベルトR. Kötzsche und W. Ebert: Geschichte der  
ostdeutschen Kolonisation. Leipzig 1937,  
251 S. (RM. 5. 80)

増田 四郎

獨逸民族發展の重大な一面を形成する東方獨逸植民運動の史的考察は、一方では土地制度の研究といふ經濟史的要求から、他方では人文地理の發達に伴ふ歴史地理學的觀點から漸く學界の注目を惹き、前世紀の後期にも既に二三のすぐれたる研究がないではなかつた。然るにその後今世紀に入つて以來、これら各分野の長足の進歩と地方史研究の驚くべき普及とは、應接に追なき程の個別的にして實證的な研究成果を豊富に提供することゝなり、加ふるに考古學・地名學・民俗學等所謂歴史補助學の緊密な協力結合と相俟つて、學界はまさにこれらを綜合概觀せる良書の出現を期待するともいふべき域に到

達してゐたわけである。

この時にあたり、新興ナチス獨逸の登場は彼の國の盛んな史學界に對しても更に新たな課題を提出した。その一つは一應南歐文化の影響から離れて自國上代の民族生活の中にゲルマン的精神の眞髓を探らんとする企てであり、他は自國民族の對外發展とそれに伴ふ獨逸精神の發揚とを史的に跡づけんとする *Auslandsdeutschum* 乃至は *Grenzlandsdeutschum* 並びに獨逸皇帝政策の問題即ちこれである。

エルベ・ザールの流れと「ボヘミヤの森」を以て東方異民族への國境線としてゐたフランク王國の昔より、その運動の最高潮に達した十三・四世紀を経て今日に至るまで千百年餘、孜々として倦まざる獨逸東方植民活動の綜合的史的研究が、上述せる如き學界の成果と時代の動向を背景として、いま吾々の前に極めて *anschaulich* に展示せられたこと、殊にそれが斯學界の耆宿 R. Kötzschke とその門下によつてなされたことに吾々は多大の興味とよろこびを禁じ得ない。

## 二

夙に經濟史の諸著によつて本邦學界にも弘く紹介せられ、嘗てはまた「東獨逸植民史史料集」(1. Aufl. 1912; 2. Aufl. 1931)を編纂し、現にライプツヒ大學『地方史移住學研究室』の重鎮として歴史地理學の領域に絶大の貢獻を齎しつつある Rudolf Kötzschke 教授については今更多言を要しなうであらう。

さて本書の構造を見るに、先づ最近殊に大戰後の數多き研究成果を基礎として一つの概觀を與へることを目的とし、その對象はどこまでも東方諸地方に於ける外ならぬ獨逸民族の移住に限るべき旨を明かにした簡明な序文と、それにつゞく三つの部門から成つてゐる。その第一は Boett によつてなされた東獨逸植民地方の地理的・景觀的基礎の概説(九—一七頁)であり、第二は Kötzschke 教授自らによつてもなされた植民運動の全般に亙る詳細にしてしかも直截なる歴史的記述(一八—二六六頁)であり、第三は再び Boett によるこの地方の村落移住形態並

びに都市形成のいはゞ聚落地理學的考察（一六七頁—二一四頁）であつて、それに加ふるに卷末二十葉に餘る有益な地圖と該博な參考文獻目錄とを以てしてゐる。

第一の部門は極めて簡單なものではあるが、奧太利匈牙利等を含む東南諸地方・中部 Stutengraum・北方バルチック海沿岸地方と夫々地理的景觀を異にするに従ひ、移住形態乃至經路の上にも自らそれに應じた變化を現すであらうことを注意せしむる點に於て、本書全體のよき序論をなしてゐる。併し本書の中核をなし、且つ吾々關心の強き對象をなすものは、記述の大半を占める第二の歴史的描寫であることはいふまでもない。

擬 Kötzezhke の敘述を一讀して先づ最初に氣付くことは、彼の史想が從來の彼の諸著に比し著るしく圓熟した域に達してゐる點である。嘗に經濟史、移住史のみならず、諸般の補助科學、就中政治史に關する周到適宜の配慮をなし、これらを縱横に織なして、宛然東獨逸植民運動の Grundlinien を描出せんとしたことは、その短編の故に未だ完璧を期し難いとはいへ、讀者をして、早く

歴史地理學の開拓振興に奔つたこの史家の到達點を彷彿せしむるに充分であらう。

フランク王國とその東方邊疆異民族スラヴエンとの交渉に筆をおこした Kötzezhke は、植民活動の最初且つ最大の高潮期として通常そのまゝ “Ostdeutsche Kolonisation” の名稱もて解せられる十二乃至十四世紀の勃然たる民族的伸張の時代を把へ、この部分に對し、彼自身の過去の尊き學問的體驗からにじみ出た詳細な觀察—時代別にまた地方別に—を投げてゐる（二九—一〇五頁）。古くは民族、否寧ろ種族的對立感に動かされてゐた東方諸族との確執は、フランク王國の解體・基督教の傳播・神聖羅馬帝國の誕生といふ獨逸國家成立の最初の蠢動期を経てオットーネンの時代に至れば、やがて基督教徒對異教徒でふ宗教的對立に變じ、他方また諸帝の東方政策を加へて植民の政治的基礎は漸く高まり、特に十二・三世紀に見る政治・經濟・法制的あわただしき變革—領邦の形成・市民階級の擡頭・農民の移動性等—の過程が、この大きな民族的使命の遂行に如何に力強く作用したかを説

く生彩に富んだ敘述は、吾々をしてこの時代の社會史的  
重大性を想はしめずには措かぬ。かくて吾々は、南はド  
ーナウ下流より北は露西亞の國境エストランドに及ぶ廣  
大な領野に濃淡とりどりのあやをなし、獨逸民族固有の  
法と慣習を擔つて、多様ではあるが、比較的計畫的な

Gemeinschaft 乃至は Gemeinde としての移住形態を描  
きつゝ、一步一步獨逸の村落、獨逸の都市を形成しゆく  
潑瀾たる移民の動きと、異民族への接觸から強められる  
獨逸民族意識の向上に接することが出來よう。同時にま  
たかうした植民の形態こそ、移住者個々の自由を伸し、  
移住團體の自治的精神を育成するの意味に於て最も自然  
的であり、最もゲルマン的であつた所以に氣付くであら  
う。

中世より近世への推移は、植民史にあつてはいはゞ一  
種の停頓期であり、Kötschke による第二の高潮期即ち  
“Neu-ostdeutsche Siedlung” は、宗教改革以後、殊に十  
八世紀普魯西・墺太利兩強國の興隆を見た「國家的植民」  
(Staatskolonisation) の時代に當る。極めて Plannässig

な移住形態を呈するこの期の植民政策は、他方マーカン  
ティリズムの研究と併せて更に深く顧みらるべき問題を  
持つてゐる。

最近ナチス獨逸が所謂 “Blut und Boden” を強調し  
て民族の醇化を計り、移民活動を以て新しき國家への奉  
仕なり (“Siedertum ist Dienst am Staat”) と唱へ  
(二六五頁、隣接各地殊に東方國境に血と土に則る「祖國  
永遠の護り」を築かんとする植民政策のめざす方向も、  
またその精神も、かくの如き民族史的背景を再認識する  
ことによつて愈々明かとなるであらう。さもあれ新しき  
民族國家の政策に、如何にしてこの古きゲルマン的精神  
を盛らんとするか、Kötschke の記述はこの問題を暗示  
しつゝ終つてゐる。

第三部門をなす Ebert の研究は、大體 Kötschke の  
Grundlinien に沿つて農地の開拓、耕作の技術、聚落・  
都市の構成等をいはゞ移住形態學的に概説したものであ  
る。そこに吾々は、やゝもすれば極めてシェマーティッ  
シユな考察に陥り易いこの種の研究が、特に政治史・經

濟史を考慮する限り、實際は簡単に類型的に片付けられぬ様相を示すものなることを實證されるわけである。

### 三

以上の如くして本書は東方植民運動、わけでも中世紀に於ける彼の民族の偉大なる功績を全體として把握し、努めて *anschaulich* にその全貌の概觀を得せしめんとした點に於て、所期の目的を充分に達してゐるといはなければならぬ。併しこゝに注意すべきは、かゝる種類の著作には往々にして個別的事象乃至史實に對する評價の不確實・曲解の危険必ずしも絶無を保し難いといふことである。例へば個々都市法の繼受・Pat 制成立の過程・商業的對外移住の起源・所謂 *Locatours* の法的地位等々といふ個別的具體的な問題については、尙ほ論議若くは詳論さるべき多くの疑問に逢着するであらう。併しかうした問題は姑く措き、吾々は次の二三の點に關し、比較的一般的な問題としての望蜀の感を述べて置きたい。

その第一は、かくも大規模なる植民活動が、逆に本國

### 書評

獨逸に與へた經濟的・政治的影響について、特に顧みらるゝ所がないといふ點である。植民地の開發が十三世紀以降に於ける西歐商品市場に與へた大きな變動、十五世紀に見る獨逸武士國國家の政治的動向等は植民史上看過すべからざる事件ではなからうか。その第二は、中世紀に關する記述の全體にはその民族史的基調が巧みに描寫されてゐるが、他の半面をなす基督教的精神史的方面、換言せば *Wendenkreuzung* の動機、俗界諸侯に劣らぬ聖界貴族の獻身的努力、諸教團活動の內的意義とその機構等に關する考察の比較的稀薄なるに想到することである。近世、殊に十八世紀以降はいざ知らず、少くとも十二・三世紀の史的敘述に當つては、聖界の演じた役割、それに伴ふ中世人の *Gesinnung* をもつと強く組織的に評價すべきではなからうか。而してまたこの問題は、「ゲルマン故地の回收」といはれる東獨逸植民運動一般の精神史的基礎を規定する意味に於て、更に興味ある課題を投げかけるものである。

これに關聯して吾々は第三に、植民活動と民族意識發

## 一橋論叢 第一卷 第二號

展との内面的關係を尋ねなければならぬ。Kötzscheが時の詩人 Walter v. d. Vogelweide の句 „tinschin zult sat vor in allen“ を引用して十三世紀に高潮したとす獨逸民族の自覺は、其の當時の植民活動の史的推移と果してどの程度の内的必然を有したと觀らるべきであらうか。ナチス獨逸の政情を反映した編末の記述に對しては、單に「時勢に阿ねる立論」等と感ずるよりも、吾々は寧ろ眞摯にかく主張し得る獨逸史學界に絶大の敬意を表し、その現状を羨むものである、その故にこそ、この内的關聯の研鑽に多大の學問的關心と興味を禁じ得ない。これを中世に關していへば、果して「何が中世獨逸民族をしてさうさせたか」の疑問を深めると同時に、そこから一方では中世そのもののより、深き理解の必要を覺え、他方では遠く古ゲルマンの民族生活にまで遡る必然的な歴史探索の絲の存在を想ふべきではあるまいか。

最後に一言すべきは、卷末に附載された参考文献についてである。三百點を越える特殊文獻の羅列、殊にその大部分は戦後のものであり、しかも一九三三年以降に顯

著な増加を見せてゐることは、現代獨逸史學界の傾向の一斑を示すものとして先づ吾々の一驚を喫するところである。併し残念にもこの目録には個々文獻の Bedeutung に關する配慮が少しも拂はれてゐない。のみならず吾々が常に重視すべき古典的な研究—例へば Sattler の Ordis に關する諸研究・Haack の教會史第二乃至第四卷—また近くは一九三一年に出た Holmeister の論文等を見視したことは、極言が許さるゝならば、餘りに斬新に走り玉石混淆に陥つたとの誹を免れないであらう。

尤も以上の立言は本書の性質上、Kötzsche にとつてみれば或ひは的なきにはなされた矢であるかも知れぬ。従つて吾々はこの方面に於けるかゝる概説書の出現を心から祝福するに吝かではないが、本書が餘りにも出來上つた概觀の故に、吾々初學者によつては、却つてこの書のみから自らの問題を把握することに多大の困難を感じるものであることを附言して、この紹介を終りたい。

(昭和一二・一二・二〇)